

財団だより

多摩川

2000.3 第85号



アカネズミ (ネズミ科)
体長8~13cm。草や低木の
よく茂った中に住む。



'99.11.6~7 開催した「多摩川の源流を訪ねる会」源流の水干に到着

■多摩川現風景■

(41) 多摩川の源流を訪ねる

人が川を見るとき、目の前の川がどこから流れてくるのか、川の流れ始めの姿はどのようなものなのかを知りたくなる。若い人ほどその気持ちが強いようだ。

大人になっても、いつまでも少年時代、少女時代の夢を追いつけている愛すべき人達がいる。

今年も、11月6日から7日にかけて、「多摩川の源流を訪ねる会」が開催された。

今年で14回、毎年紅葉の時期になると、世田谷区役所前と川崎市麻生区役所前からマイクロバスが、それぞれ1台ずつ出発し、はるか笠取山を目指す。

車中では、参加者が自己紹介をかねて、多摩川にかける思いを発言する。途中で寄りながら、小河内ダムまで約4時間、マイクが何回も参加者の間を廻っていると、それぞれの参加者の気持ちがすっかりとけあい、車中は和やかになる。

途中、羽村用水堰、小河内ダム、小菅川の雄滝などに立ち寄り、小菅村役場で「多摩川環境セミナー」が開催される。世田谷、川崎からの参加者それぞれが属する市民団体から、多摩川に関する日常的な取組みについての報告があり、また地元、小菅村、丹波山村から小菅の湯など地域振興の動き、下流地域との交流などについて熱のこもった紹介があった。

小菅村役場に別れをつけ今晚の宿である丹波山村の民宿に到着するころには、もうすっかり日が暮れている。宿では、ささやか且つ中身の濃い宴が始まり、談論風発、皆がすっかり解け合う一夜が過ぎて行く。

翌朝、笠取山山頂をめざして宿を出発する。

作場平登山口、笠取小屋、水干神社、源流の水干は標高1,865 mにあり笠取山山頂(標高1,953m)の懐にある。この始まりの1滴が多くの川を集め、大きくふくらんでやがて東京湾に流入するのである。

●関連する財団の研究助成

〈学術研究〉

①多摩川上流いわゆる奥多摩地域の環境保全のための資源調査および応用地理学的研究

1982年 徳久球雄 青山学院大学 (No.62)

②多摩川源流域の山岳信仰と自然保護に関する調査研究
長野 覺 跡見学園女子大学 (現在研究中)

〈一般研究〉

①多摩川水源山村地域における冷水資源の利用
一山葵栽培一

1994年 上野福男 駒沢大学 (No.85)

②多摩川源流部における支流・沢・尾根等の名称とその由来に関する調査研究

1999年 中村 文明 多摩川源流観察会 (No.115)

多摩川散歩

■多摩川源流絵図完成■

多摩川源流観察会 会長 中村 文明

ご承知のように多摩川は最初の一滴を塩山市にある笠取山の水干にしるします。無数の沢を集め、水量を増し川幅を広げながら、水干沢、一ノ瀬川、丹波川、多摩川と名前を変えて138キロを旅して東京湾に注ぎます。

多摩川は、日本の代表的な都市河川の一つですが、その源流部は、深く刻まれた谷と鬱蒼とした森に覆われており、東京都の見事な水源林地帯でもあります。私たち多摩川源流観察会は、この源流部のありのままの豊かな自然に着目し、知られざる源流部に足を踏み入れ、その全貌を探索する

旅を開始しました。

源流部一帯に広がる数え切れない滝や沢、淵の地名とその由来を調査し、この度「多摩川源流絵図」を完成させることが出来ました。地名の一つ一つに、源流部に生活する人々の自然への限りない畏敬の念と愛情が託されていることに、感動と感銘を覚えてきました。

「出会い滝」「ねじれ滝」「下駄小屋の滝」「ゴケンの滝」「ヤソウ小屋の滝」「精錬場の滝」「犬尻り」「坊主淵」「手取り淵」「テンカン淵」「コウゾウ淵」「オイラン淵」など、それぞれにユニークな由来を持つ滝や淵たちに出会えて、大変光栄でした。泉水谷、竜喰谷、大常木谷、三条谷、大黒茂谷などの谷も、油断すれば命に関わる危険なルート連続でしたが、未知なる世界との遭遇はまさに至福の時でした。

「自然を親しむ」「川と親しむ」そんな自然学習に、この「多摩川源流絵図」を活用していただければ幸いです。さらに、この絵図をヒントに地名とその由来を訪ねる旅が全国各地で開始されることを願っています。一部1,300円です。ご希望の方は下記へご連絡下さい。

連絡先

- *塩山市上粟生野105の2
多摩川源流観察会事務局 中村文明
電話 0553-33-5395 FAX 33-7959
- *川崎市多摩区宿河原1の5の1
二ヶ領・せせらぎ館
電話 044-900-8386
- *世田谷区玉川2-4-4 玉川酒販会館4階
たまがわネット
電話 03-5491-7476
- *川崎市麻生区王禅寺2625-29
多摩川と語る会 田中喜美子
電話 044-954-3588
- *国分寺市南町3-23-2 小松ビル3F
多摩川センター
電話 042-326-5135



▲多摩川源流絵図

私と多摩川



奥多摩御前山に咲くカタクリの花

東京アルコウ会 椎名宏子

私は東京アルコウ会という山岳会の会員です。東京アルコウ会は、大正10年の創立で民間の山岳団体としては一番古い会です。父は創立会員でした。すでに今は亡く山のことを思うと父の面影がいつも思い出されます。父の影響でしょうか、私が山へ興味を持ち山へ行くようになって、父の紹介で東京アルコウ会に入会しました。私が高校生ときでした。

ちょっと脱線しますが東京アルコウ会の発起人は、当時そうそうたる方々でした。菊地寛、田山花袋、大町挂月、遅塚麗水、小暮理太郎、谷口梨花、上杉慎吾、松崎天民、三島章道、澤田晴廣、林良三、井關孝雄、三好善一氏等、文士画家十数名でした。大正10年春、桃の花に誘われて玉川辺りを遠足したのが動機となって生まれたのが、此の東京アルコウ会だったようです。

さて、本題に入りましょう。生まれたのが隅田川沿いの浜町、多摩川の近くの柿ノ木坂で幼少の時を過ごし、一時利根川が近い野田に疎開しました。もともと日本は河川文化ですから、こじつけなくとも人の住居は川の近くにあるものです。御多分にもれず、私が今まで住んできたのは川の近くでした。

冬は凧上げ、夏は水遊びと父に連れられよく多摩川の河原へ遊びに行きました。戦前の多摩川は水が澄み、きれいな砂利が川床にはあったように記憶しています。足を川につけた時のどきどきするような水の流れや、冷たさを覚えています。川堤を散歩した土の柔らかな感触や、河原を飛び交うトンボの姿も懐かしい思い出の中の一駒です。

結婚を契機に豊島園の近くに住むようになり、今度は荒川の秋ヶ瀬公園などへ、サクラソウを見に子供を連れて行ったりしました。しかし、私たち家族の心の故郷は、川ではなく山でした。主人も東京アルコウ会の会員でしたので、暇さえあれば子供たちを山へ連れて行ったものです。

子育ての最中、私は乳癌で手術を受けました。家族で行った手術前の尾瀬行は、それまでの私の観念を一変させました。1950年頃の尾瀬とすっかり変わった姿に接し、この先もし神が私に生をお与え下さったなら、かけがえのない美しい自然を護るために、私の一生を捧げようと思ったのです。その後、幸い病が癒え、尾瀬の自然を守る会の尾瀬自然保護指導員の第1期生として、積極的に活動をはじめました。

現在は東京都山岳連盟の自然保護委員長として主な東京都の山々に親しみつつ、奥多摩の山々の保護活動に取り組んでいます。

私たちが3年前にはじめた御前山のカタクリの保護がきっかけで、沢水の汚染を知りました。花の最盛期には1日に2000名も山に入ること、適当な場所にトイレが無いこと等から、人のし尿による汚染が懸念されました。

御前山は、多摩川の源流に当たります。私を今まで培ってくれた山と川が、ここでクロスしたことになったわけです。多摩川の清流を願うなら、源流の山々を大切にしなければなりません。幸い(財)とうきゅう環境浄化団の助成金を受けられ、私たちのささやかな活動に張りが出ました。水質調査を続け、因果関係を正すこともさることながら、昔ながらの多摩川の清流が戻って欲しいと心より祈念し、活動を続けたいと思っています。

よみがえ

甦れ！多摩川

■谷沢川を歩く■

世田谷区桜ヶ丘付近を源として、上用賀、等々力など世田谷区南部を流下して多摩川に合流する、全長3.7kmの一級河川である。

多摩堤通りを玉堤小学校のバス停で下りる。ひっきりなしに自動車が行く多摩堤通りは河口を覗くのもたいへん危険なので、信号を守って、渡らないといけない。谷沢川はバス停の傍から、多摩堤通りをくぐって多摩川に流入している。りっぱな水門があり、多摩川が溢れた時には水が谷沢川に逆流しないように備えている。

谷沢川の水は澄んでいて、上流から運ばれた落ち葉が水底に貼りついている。

側道がないので、迂回して上流へ向う。

野毛1丁目あたりでは、人家が密集していて、谷沢川に近づけない。

しばらく行くと、谷沢川は丸子川と交叉する。丸子川の水路が、谷沢川にかかる橋の上を流れていて奇妙な感じである。ここで人工的に丸子川を谷沢川をオーバーパスさせないと丸子川の水は全部谷沢川に流れこみ、ここから下は丸子川が無くなってしまふ。昔は、丸子川と谷沢川はどういう関係になっていたのか気になるところである。どなたかご存知の方はおられますか。

坂道を上がって行くと等々力1丁目ノ5あたりに堺橋がある。野毛と、等々力と、玉堤のちょうど交点にあたる部分である。しばらくゆくと矢川橋につく。

このあたりでは、川底に下水道管が埋設されていることが標示されている。川は斜面を流れ下っており、川底には紅葉の落ち葉がはりついて見事な模様を見せている。流れが落下する手前のよどみには鴨が七、八羽ゆうゆうと泳いでいる。

間もなく、側道は等々力渓谷公園に入っていく。水は清流といえるほどきれいな水である。このあたりでも紅葉は終わりの時季を迎えて、流れに散っている。国分寺崖線のはけに分け入っていくにつれ深山幽谷の趣きがあり、都会のなかに、こんな不思議な空間があることに驚く。

等々力渓谷は、以前から東京百景の一つとされていたが、平成11年3月に東京都指定名勝となっている。1kmほどの小さな渓谷であるが、渓谷としては都区内では唯一の存在だそう、たいへん貴重な自然である。谷沢川が国分寺崖線に浸食してきた渓谷である。台地と谷との標高差は約10メートルほどである。

渓谷の斜面にある樹木は、ケヤキをはじめ、シラカシ、コナラ、ヤマザクラ、イロハカエデなどがある。

不動の滝は、二つの龍の口から細々とではあるが水を吐き出している。滝としてはちょっと心細い。等々力の地名が滝の音がごうごうと轟いていたことに由来しているようで、昔は、行者が滝に打たれに来るほどの水量だったのだ

あろう。これからも、この水が絶えないことを祈念して、歩みをすすめる。

左岸にある横穴古墳跡を過ぎ、等々力渓谷に別れをつける。

昔このあたりにゴルフ場があった名残りのゴルフ橋の螺旋階段をあがって、環状八号線あたりで、市街地にする。

しばらくゆくと東急大井町線の等々力2号踏切の手前にある権蔵橋にいたる。ちょうど、大井町線の等々力と上野毛の中間あたりに位置するところである。

中の橋をとおり、川が1mほどの段差のある流れになっており、姫の滝といわれているようだ。

姫の橋の手前で、川はちょうど縦にコンクリートの壁で二分されており、右岸側の半分はまったく水が流れていない。水量の多いときは、両側の川に水が流れるようになっていたようだ。話によると、約20年前に浄化のために実験的につくられたものとのことである。

矢澤橋あたりでは、下流側はくねくと湾曲して流れており、段差のある流れがしぶきをあげている。

宮前橋を過ぎ、谷沢川は北上する。

田向橋あたりではフェンスに葛科の植物をからませてあり、緑の帯が川に垂れ下がって、なかなか良い雰囲気である。

田向橋、弁天橋、稲荷橋あたりに玉川中学校と中町小学校が仲良く並んでいる。隣接していた両校の敷地を有効利用するため一体化されたとのことである。学校と川の間の道路は雨水浸透のつくりとなっているそうである。

稲荷橋から上流をながめると両側のフェンスの葛が茂っていて、緑にかこまれた川の感じがすばらしい。側道の僅かな土地に植えこまれた植物がこのような自然を演出できることは素晴らしいことだ。

丸山橋の上流の左岸側は、かなりの太さの立派な柳の並木が川にそってあり、鬱蒼とした枝が風にゆれていて壮観である。

駒沢通りを渡る富士見橋から先も、狭い側道と川との土地によくもまあ、これだけ植栽を施したと感心するばかりである。茂みが根付いていて、小鳥たちも川と茂みの間を飛び交っている。ただ、川の両側の直立した擁壁が倒れるのを防止するための支えのポールが並んでいるのが奇妙な感じである。

谷沢橋、高山橋、このあたりは川は一直線、流れはきれいである。上の橋、さかえ橋、宇佐前橋、向い大橋、三角橋、谷沢川は首都高速3号線の高架の下を流れている。高架の下に「谷沢川吐上部」のタイル張りの建造物がある。平成6年に「清流復活事業」として、約2.2kmほどはなれた仙川から隣間浄化した後、導水しここに吐出するようにした。吐出口には小さな児童公園があり、ここで放出される水は直接川に流れるものと、公園に流れる噴水や、川をまたぐアーチを渡ってから川に入るものに分かれるような

案内図



至、二子玉川駅

仕組みになっている。これにより、谷沢川の水量は3倍近く増え、水質も約40%改善されたといわれる。従来、下流の等々力渓谷の水が泡立ち、濁り、臭いがするなどと言われて来たが、それもだいぶ改善されたようである。

今回、用賀駅付近から先の谷沢川は暗渠のため、たどれなかったが、源は、桜ヶ丘付近とも、上用賀6丁目付近の小湧水ともいわれているが定かではない。

かわせみ
翡翠

財団からのお知らせ

〈研究助成報告書完成〉

助成集報(27巻)並びに多摩川環境調査助成集(第20巻)が完成しました。

助成集報27巻

研 究 課 題	代表研究者	所 属
カワラノギクの個体群と生育環境の復元についての研究	井上 健	信州大学理学部助教授
多摩川における増水が生物の分布に及ぼす影響(フラッシュ効果)についての研究	亀山 章	東京農工大学農学部教授
多摩川全域における溶存有機化合物の蛍光分析と構造変化に関する研究	石井 忠 浩	東京理科大学理学部応用化学科教授
多摩川水源林の防火帯に発達する草本植物群落の種子繁殖における訪花昆虫の役割	鈴木 和 雄	山口県立大学生活科学部教授
多摩川上・中・下流および河口における底泥中の石油系炭化水素の微生物分解浄化	小林 晶 子	東京農工大学工学部助手
多摩川流域における新テレメトリーシステムを用いたアナグマの環境選択	神崎 伸 夫	東京農工大学農学部助手
多摩川上流水域における付着層形成過程の解析	森川 和 子	東京農工大学農学部教授
多摩川河川敷のカビ臭発生原因としての河床付着微生物の研究	山本 鎔 子	明治大学農学部教授

多摩川環境調査助成集第20巻

研 究 課 題	代表研究者	所 属
玉川上水系の用水の地域に果たした役割に関する調査 —砂川用水の水利用を中心に—	小坂 克 信	日野市立日野第7小学校教諭
多摩丘陵から湧出する地下水の研究 —1.生田緑地・早野・片倉の湧水の水質調査 2.生田緑地の湧水とその流路の水質調査—	及川 利 男	サタデー・サイエンス・スクール
多摩川中流域における神社の境内の樹木の研究 —特に樹種構成とその配置について—	秋山 好 則	東京都立武蔵高等学校教諭
国分寺崖線の総合的環境保全のための市民提案型広域行政施策に関する調査・研究	金子 博	みずとみどり研究会
住民に提供するための多摩川流域の植物写真画像システム作成に関する研究	大川 ち 津 る	聖徳学園高等学校講師
条里遺構の分布を手掛かりとする多摩川流域の古代における水田景観の研究	菅野 雪 雄	武蔵野文化協会会員

▶▶▶ 寄贈文献の紹介 ◀◀◀

・「井戸ノートー地下水の眼をのぞく」
発行・制作 浅川勉強会 1999年

浅川流域で環境保全活動に取り組んでいる市民団体「浅川勉強会」の活動記録である。

浅川流域の井戸15ヶ所の住民への聞き取り調査、昨年11月に開催したフォーラム「水環境の再生にむけて」の講演録を収録している。

・「多摩川音頭余話」
発行・著者 角田益信 1999年

筆者のライフワークの一つとも言うべき郷土史研究本としてまとめ、本書で5冊目となる。

本書は昭和4年に北原白秋が作詞した「多摩川音頭」に取り上げた多摩川の情景(地名、名所、産業等)について解説している。

新しい川づくり

平成9年に河川法が改正された。明治29年(1896年)に制定されて以来、河川法の主な改正は2回目である。制定時はもっぱら治水が目的とされていたが、昭和39年の改正では、水系一貫の管理制度の導入と利水関係規定の整備が大きく取上げられた。そして今回は、環境という切り口と、地域の意見を反映した河川整備の計画制度の導入という考え方が取り入れられることとなった。

つまり、新しい川づくりは環境面に十分に配慮し、流域の市民の意向を反映したものとすることとなったのである。行政、市民、企業等が、パートナーシップを形成して河川整備に取り組むこととなった。多摩川についても、現在、この新しい河川法の精神に基づく新たな試みがすでに始まっている。

平成10年12月に、これからの多摩川を育むコミュニケーションの場として「多摩川流域懇談会」が設立された。

また平成10年9月に、懇談会に参加することを主な目的とする市民による自主グループ「多摩川市民フォーラム」が結成された。

多摩川河川整備計画についての多摩川市民アクションも平成11年の夏から始まっている。

多摩川のある地域の市民と行政が河原を歩きながら考え、一堂に会してお互いの意見を交換しあい、結果を今後の河川整備計画の立案に反映する活動である。

それらのアクションを日を追ってしてみると、次ぎのようになる。

- | | |
|-------|-------------------|
| パート 1 | 7月24日登戸、宿河原堰付近 |
| 〃 2 | 8月28日二子玉川、兵庫島付近 |
| 〃 3 | 9月26日狛江、和泉多摩川付近 |
| 〃 4 | 10月10日六郷橋～大師橋 |
| 〃 5 | 11月14日羽村堰付近 |
| 〃 6 | 12月 5日調布市、京王多摩川付近 |
| 〃 7 | 1月15日府中市、中河原駅付近 |
| 〃 8 | 2月 5日川崎市、二子新地付近 |

これらのアクションを通じて市民からいろいろな意見が出た。そのうちのいくつかを紹介すると

- *川崎市で検討されている多摩川エコミュージアム構想について
- *環境に加え、歴史、文化遺産の整備が必要
- *レスキュー体制
- *雨水浸透枳
- *せたがや湊
- *癒しの場としての多摩川・バリアフリーの提案
- *放流魚の生態系攪乱の問題
- *災害時の危機管理体制
- *汽水域の干潟、葦原の保護
- *ホームレスや不法耕作地の問題
- *河原でのバーベキューによるダイオキシンの問題
- *堰と魚道の問題
- *教育河川構想
- *羽村の堰の取水量について
- *ワンド
- *スーパー堤防
- *多摩川らしさの追求などなど…

平成11年10月30日には東京農大において「多摩川河川整備計画」－中間での報告と意見交換－の催しが行われた。

これらの一連の動きは従来からの審議会、公聴会などという仕組みとは異なり、市民と河川管理者である行政が、川の現場で直接語り合う新しい場ができていくのを感じる。

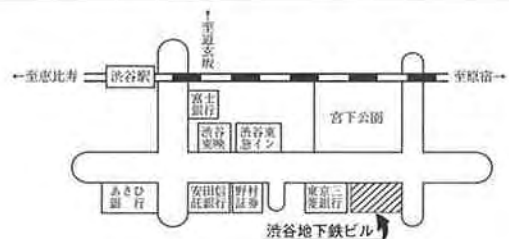
吉野川第十堰の住民投票についても、行政と市民の間に、日常的に情報が公開され、風通しのよい関係がもたれていれば、もっと異なった展開があったかも知れない。

いずれにせよ、新しい河川法ができたのだからその趣旨を十分に活かした市民と行政の関係が樹立することがこれからの課題である。

その意味で、最近の多摩川での動きには目を離せない。

2000年2月10日

- 発行日 平成12年3月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03) 3400-9142
FAX (03) 3400-9141
URLアドレス <http://www.246.ne.jp/~tokyuenv/>



*印刷所 雄文社 〒336-0001 浦和市常盤9-11-1 TEL (048) 831-8125